



座談会

これからの漢字指導を考える — その魅力と可能性 —

うづき けいこ
卯月 啓子
(柏市立高柳小学校教諭)



東京都生まれ。言葉や漢字、文章のおもしろさを教える指導を実践・提案・指導する。NHK教育テレビ「ことばあ!」番組委員。93年大村はま奨励賞受賞。02年NHK教育テレビ「教育フォーカス」で漢字の授業放映。著書に、『楽しい国語シリーズ1 漢字と遊ぶ 漢字で遊ぶ』『子ども漢字百景』（東洋館出版社）ほか多数。

たなはし ひさこ
棚橋 尚子
(奈良教育大学教授)



愛知県生まれ。光村図書小学校国語教科書編集委員。専門は国語教育。論文に「現代社会における漢字表現」（朝倉漢字講座4『漢字と社会』）、「漢字習得におけるルビの有効性の解明」（奈良教育大学「国文—研究と教育」30号）などがある。

あつじ てつじ
阿辻 哲次
(京都大学大学院教授)



大阪府生まれ。光村図書小学校・中学校国語教科書編集委員。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会国語専門部会委員。文化審議会国語部会委員。専門は漢字を中心とした中国の文字文化史。著書に『図説漢字の歴史』（大修館書店）、「漢字のはなし」（岩波書店）ほか多数。

漢字好き嫌い その分岐点

棚橋 今日は、漢字教育の問題点や、これからの展望について考えていきたいと思っています。ところで、ここにいる三人は、みんな漢字が好きだと思いますが、子どもたちの実態を見てみると、好きな子は本当にマニアのように好きで、嫌いな子を見るのも嫌、というように、好き嫌いが極端に分かれるような気がします。なぜこんなにはっきりと分かれてしまうのでしょうか。

阿辻 漢字の好き嫌いって、車やコンピュータの好き嫌いと同じではないかと思うんです。どちらも、上手に使いこなせるとこんなに便利なものはないですよ。ただ、使いこなすためには、ある程度の訓練や努力をしなければならぬ。その途中で挫折すれば嫌いになってしまったり、上手に使いこなせると大好きになる。漢字も、上手に使いこなせると表現の効率がよくなったり、あるいは誤解が避けられたり、コミュニケーションツールとしてはほんとうに便利です。小学生でそこまでの感覚をもつことは難しいでしょうが、文章が引き締まるとか、漢字を使うことのメリットは少なからず感じているのではないかと思います。でも、覚えて使いこなすにはたいへ

んな努力を要求される。そこが好き嫌いの分岐点になっているような気がします。

卯月 わたしはこれまで、一年生から六年生までまんべんなく何度も受け持ってきましたが、漢字をいちばん歓迎するのは、まだ漢字を習う前。一年生の最初のころですね。漢字を習うと大人っぽくなったと思うようなのです。平仮名を全部覚えていない子でも「早く漢字を教えて。」というくらい。でも、漢字を教えたあとに勝手に漢字嫌いになる。すごく早いです。

棚橋 習いたがっていたのに、いざ勉強し始めると嫌いになってしまいうんですよね。

卯月 そうなんです。まず、使い分けができない。例えば、「木」という漢字を教えるとき、それが「氣をつける」の「き」でも「きりん」の「き」でも、みんな使えると思っているのです。教師は、漢字には一つひとつみんな意味があるんだよ、ということ教えますね。でも、使い分けなければならないということになる、わからなくなってしまいう

うです。それから、たとえ知っていても、「上の学年の漢字や習っていない漢字は使ってはいけない。」と教師に言われたりすると嫌になってしまふ。

阿辻 でも、学年別漢字配当表って教科書レベルの話でしょう。例えば、図書館で児童文学を手にとったらまだ習っていない漢字が出てきた、というのは大いにありうる話ですよ。それでも子どもたちは楽しんで読んでいます。「使つてはいけない。」と言われると、それが枷（かぎ）になって、かえってマイナスになることもあるんじゃないですか？

卯月 そう思います。教師がこだわるのは、習わないうちに漢字を覚えると、正しい書き順が覚えられないし字形が整わない、ということなんです。でも、子どもたちって、生活の中でたくさん漢字に出会っていて、知っているんですよ。知っていれば使いたいです。神経質に咎（とが）め立てすることなしに、もう少しおおらかに対応できたらいいのですが……。それを制限してしまっている教師側の問題も、少なからずあると思います。

子どもたちは、生活の中でたくさん漢字に出会っている。



語彙としての漢字指導

棚橋 二〇〇三年と二〇〇四年に、漢字テストを作っているふたつの団体が小学校学習漢字一〇〇六字を対象に行った調査で、興味深い結果があります。ひとつの団体のテストではできていなかった漢字が、もうひとつの団体ではできている、という場合が結構あるのです。例えば、「海」は、一方のテストでは、二年生の書けない漢字ワーストワンくらいに挙がっていました。もう一方ではよく書けていたのですが。

卯月 ああ、それ、よくわかります。語彙が違うんですね、きっと。教科書で習っていない使い方が出たのではないですか？

棚橋 そうです。よくできていたほうは「海岸」、できなかったほうは「海外」という単語を書かせていたんですね。よく漢字のテストでは単漢字を取り上げて、この文字が書ける、書けない、という言い方をしますが、そうじゃない。語彙の問題が大きいんですよ。

語彙として使えるようにならなければ、漢字をいくらたくさん覚えても、生きた知識にはならない。

ね。語彙的な指導の観点が欠けているんじゃないかと思います。

阿辻 子どもたちは、単漢字ではなくて、漢字語彙として覚えているということですか？

卯月 いいえ、単漢字でも覚えさせるんですが、そうすると単漢字としてしか覚えられないわけです。ちよつと違う用例を出したりすると、「ええつ、そんなの習ってない！」となる。語彙の問題は大きいですね。

阿辻 なるほど。海岸の「海」は、海外の「海」と同じ、というふうには、なかなか結びつかないわけですね。

棚橋 先生方は、時間数の少ない中で、なかなか漢字にかける時間が取れないというのも実情でしょうから、その学年では簡単な語彙や教科書に出てくる使い方だけでいいので、上の学年でもう一回おさらいするような形で、ほかの語彙を学習する機会があるようにように思います。

もに頭に入っています。今は使いませんけど、矢鱈（やたら）とか、語彙まで含めて覚えていきますね。

卯月 昔は新聞も総ルビでしたから、小さい子どもでも、意味がわからなくても読めた。そんな中で、言葉遣いや語彙を身につけていったということはありましたね。

阿辻 日本語を読み、書き、話すということを総体的に高めていけば、漢字力も必然的に高まっていくんじゃないかという気がします。

棚橋 国語の中の漢字学習とはいったい何であるのかを、もう少し厳密に考えなければいけないのじゃないですね。

漢字と遊ぶ 漢字で遊ぶ

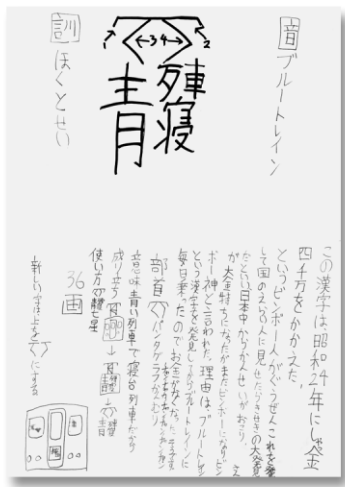
卯月 わたしは、とにかく漢字は楽しくなくちゃ、と思っていて、いろいろな楽しい漢字学習を実践しています。例えば、『漢字発見物語』といって、自分たちで新しい漢字を作るという学習があります。子どもたちは、自分で漢字辞典をほとんど使ってやっていますね。



卯月 漢字はよくできても、作文を書くとき平仮名ばかりという子どももいます。漢字テストの漢字と、文章に入れ込んでいく漢字は別物だと思っているんです。知っている漢字を、文章の中で使うことができない。

棚橋 生きた知識になっていない、ということですね。

卯月 語彙として使うところまでいかなないと、漢字をいくらたくさん覚えても、生きた知識にはならないわけです。つまり、書けていないところにつながるのかな、



【漢字発見物語】

作った漢字の音読み・訓読みはもちろん、成り立ちや用法なども文章で書いている。

棚橋 ほんとうに子どもたちは発想豊かですね。画数がすごく多くて覚えるのがたいへんそうですね（笑）。

阿辻 わたしもテレビの番組でやったことがあります。女偏に車で「女性専用車」（笑）。アナウンサーは、「重」の下に「心」と書いて、「ストレス」という漢字を作っていました。

卯月 なるほど！ 子どもたちは、こんなふうにパーツを組み合わせてアイデア漢字を作るのが大好きです。漢字の構造もわかるし、辞典もどんどん使っし、何より「漢字っておもしろいね。」「漢字の秘密がわかった！」と言ってくれます。

子どもたちがもつとのびのびと感ぜられるような漢字指導をしてほしい。

棚橋 国語以外の教科書に出てくる語彙としての漢字は、学習指導要領の学年別漢字配当表の縛りをあまり受けないまま、ルビつきで出しているところが多いようです。以前六年生の教科書で調査をしたことがあるのですが、特に理科は専門用語が多くて、平仮名にしてしまおうとかえってわかりにくいからなのか、ルビが多かったですね。逆に家庭科な

阿辻 なるほど。そこが漢字のおもしろいところですよ。漢字がわかるとなんとなく想像がつくという。

棚橋 国語以外の教科書に出てくる語彙としての漢字は、学習指導要領の学年別漢字配当表の縛りをあまり受けないまま、ルビつきで出しているところが多いようです。以前六年生の教科書で調査をしたことがあるのですが、特に理科は専門用語が多くて、平仮名にしてしまおうとかえってわかりにくいからなのか、ルビが多かったですね。逆に家庭科な

棚橋 子どもたちも、「知っているけどわざと使わない」ということがよくあるみたいで

かった場合、「数」の音読み・訓読み、書き順を教えてしまおうとか、理科の時間に「水溶液」と出てきたとき、「溶」は中学校学習漢字ですが教えてしまおう。「溶」には「溶ける」という意味があるんだよ、と言うと、かえって「水溶液」という言葉への理解が深まったりします。体育の鉄棒では、鉄の棒だよ、と言って地面に「棒」を書いたり。そういうことを年中地道に積み重ねているんです。

どでは、「洗たく機」のように交ぜ書きが多かったです。日常用語が多くて、子どもたちにも把握しやすいからだと思います。

「弱」の中にひとつだけ「羽」が交ざっている。



【漢字の間違い探し】

棚橋 卯月先生の実践を拝見すると、子どもたちは漢字を作って遊んでいるだけではなくて、その漢字の音読み・訓読みや成り立ちまで、きちんと文章で書いていますね。ユニークな漢字を作って終わってしまうのではなく、ここまでやらせることに漢字認識の上での意味があるのだと思います。

卯月 これは、『漢字の間違い探し』です。自分が間違いない漢字をたくさん書いて、

阿辻 光村の教科書でも、「おもしろ漢字大発明」(三下P58) ってありましたよね。こういう発想から既存の漢字を分析していくと、意味はよくわかるでしょうし、おもしろいと感じてくれると思います。

その中にひとつだけ、似た漢字を入れておくんです。

阿辻 弱、弱、弱……、あ、ここに「羽」がある！

卯月 早いですね、先生。これをやると、必然的に自分の間違いやすい漢字をたくさん書くことになるので、覚えちゃうんですね。こちらは、『漢字の暗号』ということで、漢字の音だけを使って文章を書かせたものです。いつも言っている「漢字の意味」をあえて取り払って、と言ったら、漢字が苦手な子どもでも大喜び。「先生、『が』はどう書くの?」「画用紙の『画』もあるし、我流の『我』や発芽の『芽』もあるよ。」なんて、復習しながら書きました。漢字指導は、集団や一斉指導ではなく個別指導なんです。こういうアプローチのしかたもあるんだな、と思いました。

阿辻 万葉仮名と同じ考え方ですね。漢字は、こんなふうに遊んだり楽しんだりすることができるといいですね。平仮名や片仮名ではそれはできない。もう少し、「漢字と遊ぶ」「漢字で遊ぶ」という発想をもつと、頭から「嫌い」ということは少なくなるかもしれないですね。

これからの漢字指導の可能性

棚橋 卯月先生の実践は時間もかなりかかると思うのですが、その分ほかの教科にける時間が減ったりしているのですか？

卯月 いいえ、減っていません。やり方の問題もあると思いますが、いくらでも工夫のしようがあります。他教科でも漢字は漢字です。例えば、二年生の算数の時間に、国語で「算」は習っていても「数」は習っていない

すね。実は、わたしも小学校時代そのような子どもでした(笑)。

阿辻 現場では、漢字についてはあまりにも杓子定規に学年別漢字配当表にこだわらずに、という現実があるんですね。でも、子どもが自発的な行動によって習っていない漢字と出会ったら、教師も積極的にそれを認めてあげてほしいですね。「漢字はおもしろい」ということを伝えるのはたいへんだと思いますが、子どもたちの手足が縮こまらないような、もつとのびのびと感ぜられるような漢字指導をしてほしいと思います。

